

# 2025年度『日本語教育』論文賞受賞論文

日本語能力と心理検査から探るグレーゾーンの外国につながる子どもの能力と支援方法

—DLA・KABC-II・P-F スタディに基づく事例研究—

掲載号：『日本語教育』190号（2025年4月発行），pp. 122-137

執筆者：橋本 はしもと ゆかり 氏（横浜国立大学）・鈴木 すずき 朋子 ともこ 氏（同）

## 【授賞理由】

本論文は、学校現場において日本語能力の不足なのか、学力の問題なのか、あるいは発達特性によるものなのか判定がつきにくいグレーゾーンの児童であると報告された外国につながる子どもが抱える問題を究明し、具体的な支援方法を提案している。認知機能、日本語能力、学力を関連づけて捉える分析の枠組みは、子どもの実態への理解を深める有効な観点を提示しており、表層で見えている子どもの問題は複合的な視点から評価を行っていく必要があることを示唆している。本研究は、公正な評価がされず不利益を被る児童をなくすという重要な課題と徹底的に向き合った意義深い研究であると高く評価する。

### (1) 日本語教育現場に対する示唆が具体的である。

日本語能力検査、知能検査、性格検査の3つの異なる視点から調査を行い、統合的に読み解いていくプロセスを緻密に記述していくことで、グレーゾーンの児童の支援に必要な視点を明らかにした支援策を明確に示しており、学校における日本語教育現場のみならず、教科教育あるいは入学前のプレスクール実施に対しても示唆に富むものである。

### (2) 新しいテーマにチャレンジしている。

本論文は、外国につながる子どもの教科学習における躓きが日本語能力の問題なのか学力の問題なのかを適切に判定するという、学校教育現場における非常に重要で困難な課題について、日本語能力検査、心理検査を用いた複合的な検査・分析を行っている点が斬新である。日本語教育や心理学といった複数の専門的知見を擦り合わせて児童の能力を測定しており、日本語教育にとどまらない新たな領域にチャレンジした論文だと言える。

### (3) 専門領域を超えて訴えるものがある。

児童とその保護者に限らず、養護教諭、特別支援コーディネーター、在籍級担任教員、国際教室担当教員など多くの関係者の協力を得た調査であることから、本論文の提案は専門領域を超えて教育現場に関わる人々に訴えるものとなっている。また、複数の検査を組み合わせた複合的なアプローチに基づいた分析結果も、様々な専門領域にまたがる示唆を含んでいる点で高く評価できる。

以上

---

## 受賞論文 要旨

### 日本語能力と心理検査から探るグレーゾーンの外国につながる子どもの能力と支援方法 —DLA・KABC-II・P-F スタディに基づく事例研究—

外国につながる子どもの教科学習における躓きが日本語能力の問題なのか学力の問題なのかといった判定は難しく、グレーゾーンの子どもの数が増えている。本研究は、先行研究で指摘された検査上の複数の問題に配慮し、学校における観察と、検査データ、日本語教育・心理学の専門的知見を擦り合わせることで、グレーゾーンの児童の能力と支援の方向性を明らかにした。具体的には、中国語を母語とする小学校3年女子（9歳）1名を対象に、日本語能力検査のDLA、多文化の子どもにとっての公平性を目指して開発されたKABC-II、性格検査のP-Fスタディを行った。事前に養護教諭・特別支援コーディネーター、在籍級担任教員、国際教室担当教員等より聴取を得た。結果、協力児のレベルと潜在能力を明らかにし、認知尺度と習得尺度から支援の在り方を示した。性格検査からは母文化が学習環境の整備を阻害している可能性も推察された。

【キーワード】 外国につながる子ども、日本語能力検査 (DLA)、心理検査 (KABC-II・P-F スタディ)、グレーゾーン

### Competence and the Support Methods of the Child with Foreign Connection in Gray Zone Explored from the Japanese Language Ability and Psychological Tests: Case study based on DLA, KABC-II, and P-F studies

HASHIMOTO Yukari and SUZUKI Tomoko

It is difficult to determine whether the stumbling blocks in the academic learning of children with foreign connections pose problems pertaining to their Japanese language or academic ability, and the number of children in this gray zone is increasing. This study clarifies the abilities of children in the gray zone and the appropriate support for them by combining observations at school, test data, and specialized knowledge in Japanese language education and psychology, taking into consideration the multiple problems identified in previous studies. Specifically, a 9-year-old girl in the third grade of elementary school, whose native language is Chinese, was given the DLA, a Japanese Language Proficiency Test; the KABC-II, developed to be unbiased for children of diverse cultures; and the P-F Study, a personality test. Advance interviews were conducted with the school nurse who also serves as the special support coordinator, the teacher in charge of her class, and the teacher in charge of the international classroom. The results revealed the level and potential of the subject a 9-year-old girl in the third grade of elementary school whose native language is Chinese child and indicated how to provide support based on the cognitive and learning scales. Based on the personality test, it was surmised that a child's cultural background may complicate the task of providing a suitable learning environment.

【Keywords】 Children with foreign connections, Japanese Language Proficiency Test (DLA), Psychological test (KABC-II and P-F Study), gray zone

(HASHIMOTO, SUZUKI: Yokohama National University)

---